

ベトナム北部地域のオンタオ儀礼 具象から抽象へ

— 文献資料と調査資料との整理から —

鍋田尚子

NABETA Naoko

非文字資料研究センター 2015年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 ハノイの家庭では、台所の神である「オンタオ」(竈神)を祖先の祭壇で他の神と一緒に祀っている。陰暦12月23日の儀礼をオンコン(土公)・オンタオ儀礼と呼び、鯉に乗って昇天するオンタオのために生きた鯉を供え、最後に川や池に放生する。これらは現在の北部地域のオンタオを祀る儀礼の特徴であり、20世紀に入り変化したと考えられる。

オンタオを祀る儀礼が最も早く伝わった北部地域において、どのような変化を経て抽象化された神となり、祖先の祭壇で祀られるようになったのだろうか。

本研究では、はじめに北部地域のオンタオに関する資料から時間的な変化を整理する。その資料をもとに、現在のハノイを中心としたオンタオの実態と中部・南部地域との比較をとおして、北部地域のオンタオを祀る儀礼が具象から抽象へと変化しことを明らかにする。そして、抽象化される背景に、台所形態の変化、北部ベトナムの社会変化、北部地域独自の土地神の性格による土公とオンタオの混交があることを示し、抽象化されたオンタオを祀る人々の観念を考察する。

The Ritual of Ong Tao in Northern Vietnam, Transforming from a Concrete to an Abstract Representation of the Kitchen God:

— An Examination Based on Reference and Research Materials —

Abstract : Families in Hanoi worship the Kitchen God called Ong Tao together with other deities by placing *thần linh*, or a censer, on the altar for ancestors. Ong Tao is believed to ride a carp to heaven on December 23 of the lunar calendar every year. On that day, live carps are offered on the family altar and released into a river or pond at the end of the Ong Tao ritual. This is a distinctive feature currently observed in Hanoi and its suburbs, though the ritual appears to have undergone some changes during the twentieth century.

Northern Vietnam has the longest history in the country, being the first area where the Ong Tao ritual was performed. Yet, the Hue region has preserved even an older form of the ritual. Then, in what context has the custom in the northern region changed? Have people there changed their view of Ong Tao? No study has discussed the process of these changes based on a review of the relevant materials and observation of the ritual. The unique characteristics of the ritual practiced in the northern region have not been examined, either.

This paper will reveal how the ritual of Ong Tao in northern Vietnam, Hanoi in particular, has transformed from a concrete to an abstract representation of the god by reviewing the relevant

reference materials and observing the ritual. The paper will propose that the abstraction of Ong Tao has arisen from changes in the form of kitchens and the northern communities, in addition to the original characteristics of the region. Furthermore, the views of people who worship the abstracted deity will be discussed.

Here the Vietnamese Kitchen God is called Ong Tao. Even though it is influenced by its Chinese counterpart, Tao Quan, the two gods are not identical. Vietnamese people affectionately refer to their Kitchen God as Ong Tao, and that is why the term is used throughout this paper.

はじめに

ハノイの家庭では、台所の神である「オンタオ」⁽¹⁾（寵神）は祖先の祭壇に置かれた「神霊」（thần linh）と呼ばれる香炉で他の神と一緒に祀られている。毎年陰暦12月23日にオンタオは鯉に乗って天に昇るとされ、生きた鯉を祭壇に供えて儀礼の最後に川や池に放生する。これらは現在のハノイやハノイ近郊地域のオンタオの特徴であり、20世紀に入り変化したと考えられる。

ベトナムのなかで北部地域は最も古い歴史を持つ地域である。オンタオが最初に伝わったのも北部地域だと考えられる。しかし現在、より古いオンタオ儀礼の形式を継承しているのは中部フエ地域である⁽²⁾。北部地域ではどのような背景のなかで変化してきたのだろうか。そして人々のオンタオへの観念は変化したのだろうか。管見の限りでは、下記のようにこれまで北部地域のオンタオを祀る儀礼の変化の過程を資料と実態から調査した研究はない。また、現在の北部地域の特徴について考察している研究もない。

そこで本研究では、文献資料の整理と現在のオンタオ儀礼の実態から、北部地域、特にハノイのオンタオを祀る儀礼が具象から抽象へと変化したことを明らかにする。抽象化され祀られる背景に、台所形態や北部地域の社会変化、元来の北部地域の特徴が影響していることを示し、抽象化されたオンタオを祀る人々の観念を考察する。

I 先行研究と問題の所在

オンタオの記述が文献で確認できるのは、現時点では17世紀の資料である（Alexandre De Rhodes 1991（1651））。17-18世紀の記述の多くは宣教師や外国人商人によって書かれたものである（Bento Thiện 1659、Tavernier, Jean-Baptiste 1681、Adriano di St. Thecla 1750、Tam giáo chư vọng 1752）。

ベトナム人が文献資料や調査研究から民間のオンタオ儀礼について記述するのは20世紀に入ってからである。ここでは主に北部地域のオンタオに関する研究を取り上げる。

20世紀初頭の研究では、年行事のなかでオンタオの儀礼の様子が記されているものが多い（Đoàn Triển 1908, Phan ké Bình 1915, Đào Duy Anh 1938）。そのなかで、フランス人アンリ・オジェ（Henri Oger）はベトナム北部地域の民間の生活を調査し、版画によって記録しており、そのなかでオンタオ儀礼に関する貴重な資料も数点含まれている（Oger, Henri 2009（1909））。

1900年中頃には、オンタオの昔話が取り上げられ研究も行われている（H. V. V 1948, Nguyễn Đồng Chi 1956, 1974, Stein, R. A 1970）。オンタオに関して詳しく記述しているのはトアン・アイン

である (Toan Anh 1967)。内容については次章で取り上げる。

また陰陽五行思想からオンタオを結びつけて論じた研究 (Trần Ngọc Thêm 1999)、中国・韓国・日本との比較研究 (Đình Hồng Hải 2015)、その他にもいくつかの研究がある (Lễ Trung Vũ 1993, Đặng Văn Lung, Nguyễn Sông Thao, Hoàng Văn Trụ 1997, Nguyễn Xuân Kinh 2013)。

日本人による北部地域のオンタオに関する研究では、大西和彦 (大西 1995, 2002, 2003, 2006, 2012, 2013, 2015) をはじめ漢文史料と文献資料によるオンタオの研究 (百野裕子 1999)、北部地域の土地神を論じた研究 (末成道男 2000, 2005)、土公との関係からオンタオを捉えた研究 (張麗山 2014) などがある。

北部地域以外のベトナム人による研究では、中部フエの研究者がフエ地域のオンタオについて記述し (Trần Đại Vinh 1995, Huỳnh Đình Kết 1998, 2001)、南部ではフィン・ゴック・チャンが南部の特徴を北部と比較しながら述べている (Huỳnh Ngọc Trảng, Trương Ngọc Tường, Hồ Tường 1994, Huỳnh Ngọc Trảng 2006, Huỳnh Ngọc Trảng, Nguyễn Đại Phúc 2013)。

フエや南部地域のオンタオ研究が地域の特徴を記しているのに対し、ベトナム人による多くの北部地域の研究は一つの資料のなかに時代の異なる各地域のオンタオを祀る儀礼の特徴が混在している。そこには、先行研究の精査や引用資料の明示がほとんどないこと、記述内容の地域や時代も明らかにされていないこと、自らの調査に基づく資料と文献資料の区別が記されていないことなどの問題がみられる。実際、ベトナムでは地域ごとに地理的条件や歴史は異なり、それぞれの時代にはそのときの社会や経済、歴史が影響している。そのことは地域によるオンタオ儀礼の違いを生む要因となる。そのため資料を整理し地域や時間について区別することは、北部地域のオンタオを考えるうえで非常に重要である。

こうした背景をふまえ、本研究ではまず文献資料を整理し、実地調査と合わせて北部地域におけるオンタオ儀礼の変化と現在の特徴を明らかにする。北部地域のオンタオがどのように抽象化されたか、台所形態の変化や北部社会の変化から考え、最後に抽象化されたオンタオに対する北部地域の人々の意識について考察する。具体的には、

- ①北部地域について記された文献資料を中心にオンタオを祀る儀礼の変化を整理する。
- ②現在の北部地域のオンタオの実態について述べる。
- ③各地域のオンタオ儀礼の特徴と上記の①、②を合わせて変化の過程を整理し、現在の北部地域のオンタオを祀る儀礼が抽象化されたことを明らかにする。
- ④最後に、抽象化され祖先の祭壇に祀られる背景について、そして現在の北部地域の人々のオンタオに対する観念について考察する。

文献資料については漢文史料の収集等がまだ十分にできていないこと、北部地域の調査も途中過程であり、現時点での考察と研究結果である。

調査は派遣交換留学プログラムの期間中 (2015年8月31日～2016年6月30日) のなか、2015年10月から2016年5月に行った。

II 文献資料からみた北部地域のオンタオ

現時点で確認できる限りでは、オンタオの記述が初めて現れるのは、1651年アレクサンドル・ド・ロード神父が刊行した『安南・ポルトガル・ラテン辞典』である。ここでは、北部地域のオンタオに関する資料を整理し、記述内容からどのような変化がみられるかを述べていきたい。

(1) 文献資料に記された北部地域のオンタオ

① 17世紀の文献資料

1651年の上記の辞典には、táo, bépの説明として táo coên, bua bép, phăm caoと記されている(Alexandre De Rhodes 1991 (1651): 724, 212)。Táo coênが灶公(táo công)または灶君(táo quân)か判断できないが竈神のことであることは間違いない。bua bépは現在のベトナム語でvua bép(竈王)である。phăm caoは18世紀に記されたオンタオの昔話に登場する2人の男性の名前; Trọng cao, Phạm langとの関連がうかがえるが、詳しくは不明である。この辞典に記されているのは、オンタオ一柱である。また「土(Thờ, Đất)」の項目には、土地神には三つの意味(役割)があると説明している⁽³⁾(Alexandre De Rhodes 1991 (1651): 770-771, 222-223)。オンタオと土地神の説明が個別に書かれていることからこれらの二つの神が、後世のように同一視されることなく別の神として崇拝されていたことがわかる。

1659年にはキリスト教徒であったベトナム人ベント・ティエンが『アンナン国の歴史』を記している⁽⁴⁾(Bento Thiện 1659: 176)。ベトナムの習俗についても触れており、そのなかで人々がオンタオを祀ることについて、「台所には竈君、竈王と呼ばれる(Bép thì Táo quân, gọi là Vua bép)」として、短い昔話を載せている。竈神の昔話は現時点でこの資料が初出である。そこには前夫が火のなかに落ちて亡くなり、妻そして再婚した夫も同じ場所(穴)で亡くなり、最後に「人々は、それが竈王なら何かするときにはいつでも頼らなければならないという」と記している⁽⁵⁾。オンタオの昔話に女性1人男性2人が登場し3人が火に関わる同じ場所で亡くなり、竈神となっていることがわかる。現在、語られている内容と同じであるが、ここでは竈神が三柱であることは明記されていない。

1681年にはジャン・パプティスト・タベルニエがトンキン人は家で「竈君(Táo quân)、先師⁽⁶⁾(Tiên sư)、ブアビン(Buabin)」の三つの神を祀ると記している(Tavernier 2011 (1681): 99)。Buabinがどのような神かは断定できないが、家を建てるときに祀る神であると役割が記されている⁽⁷⁾。家で三神が祀られているという記述は重要である。

② 18世紀の文献資料

1750年にはアドリアーノ・ディ・テクラ神父がベトナム北部地域の信仰について、人々は「先師(On Tiên Sư)、土公(Thổ Công)、竈神(Vua Bép)」を崇拝し、竈神は女性が非常に崇拝する神であると記している(Adriano di St. Thecla 1750: 147-149)。竈神の起源となる昔話には、妻ティ・ニ(Thị Nhi)と2人の夫、最初の夫チョン・カオ(Trọng Cao)、再婚相手フナム・ラン(Phạm Lang)の3人の人物が登場し、全員亡くなり男神二柱女神一柱の竈神三柱になることが記されている。また、人々は台所に三つのレンガともう一つ火を灰で覆う(火種を残す)ために四つ目のレンガ

を置く。それは夫婦（ティ・ニとファム・ラーン）の侍従であり、毎年元旦には4人が描かれた絵を取り替えるとある。この紙に描かれた竈神の絵は台所に掛けられている⁽⁸⁾。

1752年ベトナム語で書かれた『三教諸型 (Tam Giao Chur Vong)』にも人々が祀る三つの神、先師 (On Tiên Sư)、土公 (Thổ Công)、竈神 (Vua Bếp) について記されている⁽⁹⁾。西師と東師の問答形式で竈神を説き、詩の様式で竈神の昔話が語られている。そのなかにベトナムの正月に台所に竈神の紙を貼るとある。内容は上記のテクラ神父と共通している部分が多い。

また、1775年に成立した随筆集『公餘捷記』巻2「強暴大王」には、親不孝^{とが}の咎を問われ天帝の命で雷神から殺されるところを、毎日竈神を祀っていたことで竈神の入れ知恵によって雷神を撃退し、死後に強暴大王という名の神になった話が記されている (大西 2006 : 94, 2011 : 17)。竈神が天界と人間界の仲介役として登場する (大西 2006 : 94, 2011 : 17) と同時に、信心して祀ることで命が守られる司命神としての強い役割を担っていることがわかる。

③ 19世紀の文献資料

19世紀は史料に竈神の記述が現れるが、多くは阮王朝の関連の史料である。そのなかで民間の竈神については、僅かに阮朝の官選地誌『大南一統志』巻九、中部の平定省の風俗の条文に「臘月二十五夜設香燈送竈神」とある。北部地域の風俗の条文には竈神に関する記載はない。南部地域の地誌『嘉定通志』には、「祀灶神 左右畫二男形、中間一女形、亦象離火二陽中以一陰為主之義」とある。二陽一陰の意識を人々が持っていたかは不明だが、両側に男神二柱、中央に女神一柱の竈神が祀られていたことは確かである。

また19世紀末から20世紀にかけて『乩正竈神經文』、『灶君経』などいくつもの竈神経が誦されるが、別の機会に述べていきたい。

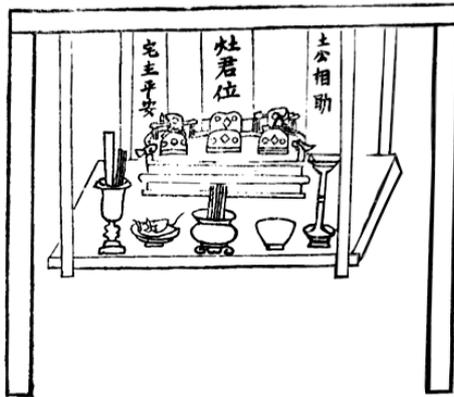
④ 20世紀の文献資料

20世紀に入るとベトナム人によるオンタオの研究の記述がみられるようになる。漢文で記された『安南風俗冊』には、正月行事のなかで陰暦12月23日にオンタオを天に送り30日に迎えること、儀礼では、送灶儀礼でオンタオの乗り物として鯉を用いること⁽¹⁰⁾などが記されている (Đoàn Triền 2008 (1908) : 15-19, 115-118)。

1909年には、フランス人アンリ・オジェが北部地域を調査しベトナム人の日常や生活技術を版画によって記録している (Oger 2009 (1909))。そのなかにオンタオ儀礼に関わる以下の5点の版画がある。①土製支脚と五徳の置かれた奥に香炉が置かれ、オンタオを祀っている様子が描かれた版画 (資料1)、②「灶君位」と書かれ、中央に女神、左右に男神が描かれた版画、③「灶君位」と書かれた神牌が置かれ、三つの冠：中央に女性の冠、左右には男性用の冠が祀られた祭壇が描かれた版画 (資料2)、④土製支脚の置かれた台所で穢れを洗う様子が描かれた版画、⑤木の根元に土製支脚やコンロが置かれた版画には、「竈王を交換」とベトナム独自の漢字チュノムで記されている (資料3)。⑤の版画は、北部地域で土製支脚の交換を木の下で行っていたことがわかる貴重な資料である。またその他に「先師」や「土公」が描かれた版画がある。「土公位」の神牌の置かれた祭壇に鯉が供えられている。



資料1 オンタオを祀る
(Henri Oger 1909)



資料2 オンタオの祭壇
(Henri Oger 1909)



資料3 オンタオの交換
(Henri Oger 1909)

ファン・ケー・ビンは、家族の善悪を報告するために天に昇るオンタオの儀礼では、男性の冠二つ、女性の冠一つとオンタオが天に昇るための馬として鯉を用意すると記している。また元旦には、祖先と土公、オンタオ、芸師にも供物を供えて拝むとある (Phan Kê Bính 1915 : 50-51)。

ダオ・ズイ・アイン (Đào Duy Anh) は、人々は祖先を祀る他に本土 (建物の存在する場所) の神 (thần bản thổ) である土公と台所の神であるオンタオを祀り、家族に不運な出来事があったときは土公に保護を求めると記している (Đào Duy Anh 1938 : 247-248)。オンタオ儀礼についてはファン・ケー・ビンの記述と共通している。

1948年に刊行された『ベトナム民』(Dân Việt Nam)には、オンタオの昔話と儀礼について記されている。著者はオンタオを観察した結果、人々はオンタオを土公と呼んでおり、商売をしている人たちのなかにはオンタオと土公を別の神という人がいるが、それは間違いであると述べている (H. V. V 1948 : 37)。また、田舎では土で捏ねた土製支脚 (ông bép) を台所に置き、年末に新しいものに交換し、古い土製支脚は池や湖など清潔な場所に放棄する。その

理由は家族に原因不明で目を患う人がいる場合、その原因が不潔な台所や土製支脚にあるといわれているからだという。今は田舎でも多くの家で五徳を使い、都市でも五徳や炭を使っているが、陰暦12月23日のオンタオの儀礼は都市でも田舎でもまだ広く普及していると記している (H. V. V 1948 : 37-38)。

20世紀中頃には、グエン・ドン・チーやロルフ・スタン等によるオンタオの昔話の収集と研究がある。別の機会ですく詳しく述べることにするが、グエン・ドン・チーが1956年に記した「台所の神」(Thần bép) の解説には、台所の神と土地神はそれぞれ別の役割と責任を持った神だが、人々のなかでは一つの神のようにとても近く、台所の神を土公と呼ぶとある (Nguyễn Đông Chi 1956 : 117-120)。また「ダウザウ翁の話」(sự tích ông Dầu Rau)

と題された昔話が載せられている (Nguyễn Đông Chi 1974 : 219-223)。この「ダウザウ」とは、煮炊きのときに鍋を載せる三つのレンガ (土製支脚) のことであり、ロード神父の辞典でも説明されているが (Alexandre De Rhodes 1991 (1651) : 210, 85)、中南部では使用されない北部地域特有の呼び方である。

トアン・アインはオンタオの祭壇や祀り方、儀礼について詳細に記述している (Toan Ánh 1997 (1967) : 112-120)。重要な記述が多いが、引用資料や調査地域が記されていないためベトナム各地域

の内容が混在している可能性がある。北部地域のオンタオの記述として注目したいのは、①祖先の祭壇の隣に簡易なオンタオ（土公）の祭壇が設置され、祭壇にはオンタオの神牌または三つの冠（または一つの冠）が置かれていること、②オンタオの昔話のなかで亡くなった3人が「土公（トーコン）、土地（トーディア）、土圻（トーキー）」の役割を与えられた神になっている点である。資料のなかには「オンタオ」と「土公」の名称が混在しており、トアン・アインが二つの神を同一視しているためだと思われる。

ここで少し「オンタオ」と「土公」について他の資料や研究者の記述をみてみたい。北部地域の研究者ダン・ヴァン・ルーン（Đặng Văn Lung）は、土公は一組の夫婦、オンタオは女神一柱男神二柱と区別するが、民間でこの二つの神を区別するのは難しいと記している（Đặng Văn Lung 1997：36-37）。その他の多くの資料では二つの神の区分を意識することなく混交したまま記している（Lê Trung Vũ 1993, Trần Ngọc Trêm 1999, 他）。トアン・アインの資料を参考にしている可能性が考えられるが、引用文献の明記がない場合が多く詳しくは分からない。末成は家を管轄している土公（オンコン）はしばしば寵神と同一視され、屋敷のある土地を管轄するトーディア（土地（神））にオンタオを含めた家の土地関係の守護神の総称を土公と記している（末成 2000：65-75、2005：169-173）。南部ベトナムの研究者フィン・ゴック・チャン（Huỳnh Ngọc Trảng）は、北部地域の現象であるオンタオと土公の同一は、東厨司命灶府神官と土地龍脈尊神、五方五土福德正神が合わさった習慣の結果であり、家神を集めて一ヶ所で祀るのは空間を節約し簡便にできるからであると記している（Huỳnh Ngọc Trảng, Nguyễn Đại Phúc 2013：46-48）。

大西和彦はオンタオの祭壇について1995年「宗教と儀礼」で、ハノイ市のバココア坊にすむベトナム人の祖先の祭壇には四つの香炉が置かれ、1番右側の香炉は合同各官、土地神霊、龍脈、オンタオに供えるものであると述べている（大西 1995：220-221）。

チャン・ゴック・テムが記した『ベトナム文化の基礎』のなかのオンタオに関する記述内容は、北部地域のものである。祀る場所について、土公は家族の禍福を決定する1番重要な神官であり、そのため五行思想では中央の次に重要な場所である左側（東）に置かれる。祭壇中央では祖先が祀られている。また土公が土地神であり寵神でもあるのは、ベトナム人が農民であることと関連し、遊牧民は馬でいくが農業国ではオンタオは鯉に乗っていくと説明している（Trần Ngọc Trêm 1999：138-153）。ベトナム人研究者のなかで、オンタオが祖先の祭壇で祀られること、その配置について説明した初めての論考である。チャン・ゴック・テムの記述もオンタオと土公が混交しており、この土公はオンタオと置き換えができる。

レ・チュン・ヴー（Lê Trung Vũ）は、オンタオの祭壇は地域により異なると述べ、南部ハーティエン（Hà Tiên）の事例を紹介しているが、北部に関してはこれまでの研究者の記述とほぼ共通している（Lê Trung Vũ 2003（1993）：43-50）。

2000年以降もオンタオについての研究はあるが、北部地域の現地調査に基づいた儀礼の報告やこれまでの研究との違いがみられる資料はない。そこで以上のような先行研究の限界を超えるため、上記の資料をもとに北部地域のオンタオの儀礼の変化を項目別に整理していく。

(2) 文献資料からみた北部地域のオンタオ儀礼の変化

ベトナムのオンタオが現在の男神二柱女神一柱の三柱となるのは、その原形となる昔話が17世紀中頃にあった。そしてその由来譚は、1750年の資料に登場人物の名前とともに詳細に記され、18世紀中頃には人々のあいだで普及していたことが明らかになった。ここではオンタオを祀る儀礼が北部地域でどのように変化したのかを整理していく。

① オンタオを祀る場所

1750年と1752年の資料から18世紀北部地域では台所で竈神の絵または文字の書かれた紙が置かれて祀られていた(Adriano di St. Thecla 1750:147-149)。

19世紀の資料にはオンタオを祀る場所に関する記述はない。

表1 オンタオを祀る場所

	祀る場所	形態
1750年	台所	オンタオの絵(3神と侍従1人)を掛ける
1752年	台所	オンタオの紙を貼る
1909年	台所(?) オンタオの祭壇	土製支脚や五徳の奥に香炉 場所は不明
1967年	オンタオの祭壇	祖先の祭壇の隣り
1995年	祖先の祭壇	1番右の香炉 合同各官、土地神霊、オンタオ、龍脈
1999年	祖先の祭壇	左(東)(祭壇を見て右):オンタオ (中央:祖先)

20世紀、1909年のオジェの版画にはオンタオの祭壇と、土製支脚と鉄の五徳が置かれた奥に香炉が置かれた版画がある(Oger 2009(1909)Ⅲ-441, 454)。祭壇は高いところから吊されているようだが、どの場所に設置されているかは分からない。土製支脚や五徳が置かれているのが台所か祭壇かは不明⁽¹²⁾だが、依り代として祀っていることから考えると台所に置かれている可能性が高い。1967年

トアン・アインは、オンタオの祭壇は祖先の祭壇より簡易で祖先祭壇の隣に置くと述べている(Toan Anh 1997(1967):112-113)。1995年大西は、ハノイの家の祖先の祭壇に四つの香炉が置かれ、1番右に置かれた香炉に神霊やオンタオ、龍脈などの神が祀られていると記し(大西1995:220-221)、1999年チャン・ゴック・テムは、オンタオは祖先を祀る中央の香炉の次に重要な場所、左側(東)で祀られるとある(Trần Ngọc Thêm 1999:139)。

ここから、オンタオを祀る場所が変化していることがわかる。オンタオは、18世紀はレンガ(土製支脚)が置かれた台所に絵や紙を掛けて祀られ、20世紀初頭までは台所で五徳や土製支脚を依り代として拝まれていた。そして20世紀の初めにはオンタオの祭壇も設けられていた。トアン・アインによればオンタオの祭壇は祖先の祭壇の隣に作られている。1990年代にはオンタオは、台所でもオンタオの祭壇でもなく祖先の祭壇で祀られている。大西の報告から、祖先の祭壇のなかでもオンタオは他の神と一緒に祀られていることがわかる。オンタオが祀られた香炉は祭壇の右(祭壇からみると左)である。

② 家のなかで祀られる神とオンタオと土公について

1651年ロード神父の辞典には、オンタオの項目とは別に土（地）の項目があり土公について説明がされている（Alexandre De Rhodes 1991（1651）：770-771, 222-223）。

1659年タベルニエによると、北部ベトナム人は三つの神、「灶君、土公、Buabin」を祀っている（Tavernier 2011（1681）：99）。1750年、1752年の資料では、「土公、先師、竈神など」と記され（Adriano di St. Thecla 1750：147-149）ている。時代が下り、1915年ファン・ケー・ビンは元旦には「土公、芸師、灶君」に供物を供えて拜むと述べている（Phan Ké Binh 1915：50-51）。芸師も先師と同じく職業の始祖を祀る神である。

これらの資料から、17世紀から20世紀初めまで北部地域の家では三つの神が家で祀られ、オジェの版画でも明らかなようにオンタオと土公、先師はそれぞれ別の神であった。

しかし、1915年以降、家で三神を祀るという記述はなくなり、土公とオンタオにも変化がみられる。1948年H.V.Vが人々はオンタオを土公と呼ぶと記し（H.V.V 1948：37）、1956年グエン・ドン・チーは人々にとっては二つの神の認識が近く、台所の神を土公と呼ぶと記している（Nguyễn Đồng Chi 1956：117-120）。1967年トアン・アインはオンタオと土公の区別を説明せず混交して記述している（Toan Ánh 1997（1967）：112-120）。トアン・アイン以降、多くの資料のなかにオンタオと土公の混交がみられるようになる。末成も二つの神がしばしば同一視されていることを指摘している（末成 2000：65, 2005：169）。

③ 土製支脚とオンタオの新旧交換について

ベトナムの土製支脚は、フングエン期（4000BP～3000BP 後期新石器時代または青銅器時代初期）、ドンソン文化（紀元前3-4世紀～紀元1世紀 鉄器時代）に出土されており、煮炊きに土製支脚が使用されてきた時間は非常に長い。しかし、オンタオとして祀られるようになった時代は現時点では分からない。

1750年の資料にはオンタオの昔話の登場人物（男性2人女性1人と侍従）が三つのレンガと一つのレンガとなっていることから、レンガ（土製支脚）がオンタオであることがわかる。しかし、正月に台所にオンタオの絵を掛けるという記述はあるが、土製支脚の交換については記されていない。1752年の資料にも、土製支脚の交換についての記述はない。

1909年、オジェの版画に木の下に土製支脚やコンロを置きオンタオを交換する絵が描かれている（Oger 2009（1909）II-31）（資料3）。1948年には古い土製支脚を清潔な池や湖に捨てると記されて

表2 家のなかで祀られる神とオンタオと土公

	家のなかの神	オンタオと土公
1659年	灶君、土公、Buabin	
1750年	土公、先師、竈神など	
1752年	土公、先師、竈神	
1915年	土公、芸師、灶君	
	(1915年以降 3神の記述はなくなる)	
1948年		オンタオを土公と呼ぶ 商売人たち：オンタオと土公を区別
1967年		オンタオの昔話 3神の役割：土公、土地、土圪 (土地（土公）の役割)

表3 土製支脚とオンタオの交換

	土製支脚 フングエン期 (後期新石器時代または青銅器時代初期) ドンソン文化(鉄器時代)	オンタオとしての土製支脚
1750年		オンタオの昔話 3人(男性2人女性1人)と侍従1人 三つのレンガと一つのレンガ *4人が描かれた絵 正月に交換
1909年		オンタオ(土製支脚、コンロ)の交換 →木の下に捨てる
1948年		土製支脚 →清潔な池や湖にすてる 田舎 土製支脚、鉄の五徳 都市 五徳や炭(のコンロ)

交換の時期は正月であった。土製支脚の交換についての記述は、20世紀に入り現れ、初頭には北部地域でも土製支脚やコンロを木の下に捨てて交換していた。

④ 鯉を供えることについて

表4 鯉を供える

	鯉の記述	内容
20世紀以前	鯉の記述現時点ではない	
1908年	鯉	オンタオが乗る馬
1909年	鯉	土公の祭壇 鯉を供える
1915年	鯉	オンタオが天に行くための馬
1938年	鯉	
⋮		
	多くの資料に鯉の放生の記述	

の版画は鯉は土公の祭壇に供えられている(Henri Oger 2009 (1909) II-331)。チャン・ゴック・テムは、農業国の人々はオンタオの乗り物は鯉であると説明しているが、その理由は記していない(Trần Ngọc Thêm 1999 : 152-153)

以上、文献に記された北部地域のオンタオについて四つの項目に分けて整理した。上記の内容をもとに、現在の北部地域の人々がどのようにオンタオを祀っているかを次章でみていきたい。

III 現在の北部地域のオンタオ

(1) 調査地と調査地概要

北部地域の現在のオンタオを祀る儀礼の実態を調査するため、ハノイ市の伝統的な村、比較的新しい地域、北部地域からハノイに移り住んだ人々、また北部地域のなかでもハノイ市との比較をするため紅河デルタ沿いの農業村で聞き取りを実施した。以下に調査地を記し、各村について簡単に解説する。インフォーマントは、20代後半から80代の男女である。

いる(H. V. V 1948 : 37-38)。しかし、H. V. Vの報告には田舎でも多くの家で五徳を使用していること、都市では五徳や炭を使用していることが記され、1948年頃には土製支脚から鉄の五徳に煮炊きの道具が変わっていることがわかる。

これらの資料から、北部地域では18世紀に三つのレンガ(土製支脚)がオンタオであったことが明らかになったが、当時は毎年交換するのは台所に貼られた絵または紙であり、

オンタオの乗り物として北部地域で鯉を供えるのは、20世紀に入ってからである。1908年『安南風俗冊』に鯉はオンタオが乗る馬と記され(Đoàn Triền 2008 (1908) : 15-19、115-118)、その後の資料でもオンタオの乗り物として鯉を供える記述が続く。しかし、オジェ編纂

ハノイ市

- タイホー（西湖）区クアンアン坊タイホー（西湖）村（Làng Tây Hồ, Phường Quảng An, Quận Tây Hồ Thành Phố Hà Nội）、伝統的な村の一つ。
- カウザイ区インホア坊コット村（Làng Cốt, Phường Yên Hòa, Quận Cầu Giấy, Thành Phố Hà Nội）、伝統的な村の一つ。
- トゥーリエム区ミーディンにあるミーディンアパート（Chung cư Mỹ Đình, Quận Từ Liêm, Thành Phố Hà Nội）、近年都市開発の進む地域。
- ハーバーチュン区バッコア坊（Phường Bách Khoa, Quận Hai Bà Trưng, Thành Phố Hà Nội）、バッコア大学があり、学生、留学生、ハノイ市出身、北部の地方出身の人々も多く暮らす地域。

また、ハノイ市郊外ザーラム県キムラン社（Xã KimLan, Huyện Gia Lâm, Thành Phố Hà Nội）2012年8月に実施した調査の内容も以下に記していく。

ハノイ市以外ではタイビン省ヴートゥー県ヴーホイ社ミーアム集落（以下タイビン省ミーアム集落と記す）（Thôn Mỹ Am xã Vui Hội Huyện Vũ Thư, Tỉnh Thái Bình）、実地調査はできなかったがハノイ市で旧ハータイ（Hà Tây）省出身の人に話を聞いた。

以下にハノイの伝統的な二つの村：①、②と、紅河デルタ沿いのタイビン省ミーアム集落：③の簡単な説明を記しておく。

① タイホー（西湖）村

タイホー村はホータイ（Hồ Tây 西湖）の東北側にある半島に位置する。村には一つの亭（ディン⁽¹³⁾ Đình）、タイホー亭（Đình Tây Hồ）、一つの寺、タイホー寺（chùa Tây Hồ）、一つの殿、金牛殿（Đền Kim Ngưu）、そして西湖府（Phủ Tây Hồ）がある。西湖府は、ベトナムの民間信仰である「聖母道（Thánh Mẫu Đạo）」の女神「柳杏聖母（Liễu Hạnh Công Chúa）」を祀る聖母信仰の聖地であり、各地域から多くのベトナム人が訪れる。伝説によると16世紀末から17世紀初めに建立されたといわれている。

タイホー亭は、タイホー村の人々の心の生活場所である。現在の亭は19世紀初頭に建立され、その後火災で壊れたが、村民たちにより再建されている。亭に残された勅封や石碑から18世紀には亭が建てられていたことがわかる⁽¹⁵⁾。

タイホー村は一族の祠堂を持つもともとの居住者と1990年以降は村外から新たに移り住むベトナム人が増え、2000年以降には外国人が多く住む地域となっている。村の様子は変わったが、亭での伝統的な儀礼は継続されているという。

② コット村

ハノイ市の西側に位置するコット村は、下安決（Hà Yên Quyết）とも呼ばれる。以前は村の多くの人々がヴァンマー（Vàng mã）と呼ばれる紙製祭祀用品とくに紙銭を製作してきた伝統的な村である。現在は機械印刷になったが紙銭を製作している家は何軒かある。

村には一つの亭；コット村亭（Đình làng Cốt）と一つの寺；コット寺と三つの廟；東廟（miếu chợ）、南廟（miếu cá）、西廟（miếu chùa）がある。亭は1831年に建立され、五柱の神が祀られている。

村の人によると、コット村が設立された当初は四つの宗族 (Đòng họ) が暮らし、その後8つの宗族が村に住むようになったという。⁽¹⁶⁾ 村には多くの祠堂が建てられている。18代当主阮氏の宗族の始祖は1436-1469という。このことから15世紀には村に居住していたことがわかる。

③ タイビン省ヴートゥー県ヴーホイ社ミーアム集落

タイビン省は首都ハノイから南西へ約110 km、紅河沿い南東に広がるデルタ地帯に位置し、東はトンキン湾に面している。紅河デルタ地帯の肥沃な土壌により主要な産業は農業である。⁽¹⁷⁾

ヴートゥー県には17世紀に建立されたケオ寺 (chùa Keo) があり、タイビン省の資料によると1061年、李聖宗皇帝の時代にケオ寺の前身となる厳光寺が建立されている歴史のある寺である。以前はナムディン省に属していた。⁽¹⁸⁾

ミーアム集落では現在でも多くの人が農業に携わっている。ヴーホイ社には寺が三つあるが、亭は戦争中に壊され再建されていない。

ミーアム集落についてはこれまでの報告と今回の新たな調査から必要な部分を取り上げて述べていく。⁽¹⁹⁾

(2) 北部地域のオンタオ

ハノイ市内での調査から、伝統的な村であるタイホー村やコット村に暮らす人々とミーディンアパートやバッコアに住むハノイ市出身の人々や北部地域から移り住んだ人々とのあいだに、オンタオを祀る儀礼についての違いは、年齢による違いも含め認められなかった。ここではハノイ市のオンタオを祀る儀礼とハノイ市以外の北部地域のオンタオに区分し、また項目によりハノイ市と北部地域に違いがみられない場合は北部地域として記していく。

① オンタオを祀る場所

a. ハノイ市

多くの家では祖先の祭壇でオンタオを祀っている。祖先の祭壇がない家では、「神霊」の祭壇が中央の部屋、または壁の高い位置に置かれている。台所でオンタオを祀っていたのは、今回の調査ではタイクン (Thầy cúng) と呼ばれる祈禱師の家だけであった。タイクン以外では、家にオンタオの独立した祭壇がある (または以前はあった) という人には出会わなかった。

祖先の祭壇には家によって香炉が一つ (祭壇の中央)、二つ (中央に前後並列で)、または三つ (中央と左右に一つずつ) 置かれている。香炉の数について決まりはないが、一つまたは三つの香炉が置かれている家が多い。

祭壇に香炉が一つ置かれている場合は、その香炉で祖先とオンタオ、土公、そのほかの神霊すべてと一緒に祀られている (写真1)。

香炉が三つ置かれている場合は、ほとんどの祭壇で中央に「神霊」の香炉が置かれている (写真2)。そこではオンタオと土公と一緒に祀られている。左右には、外から祭壇をみて右側に祖先の香炉 (ông bà tổ tiên)、左側にバーコートー (bà cô tổ) と呼ばれる祖先のなかで若くして亡くなった未婚女性のための香炉が置かれている場合が多い。左右の香炉の配置が逆の場合もあるが、ほとんどは祖



写真1 中央に置かれた一つの香炉



写真2 三つの香炉 中央「神霊」

先とバーコートーの二つが祀られている。「神霊」を中央で祀る理由は、家族を守る一番重要な神だからだという。家族によって「神霊」の香炉にはオンタオや土公、土地神、龍脈、雷神など様々な神が祀られている。祭壇の香炉は、中央に最も重要な神、二番目は右側の祖先、三番目は左側のバーコートーである。

また、中央に仏陀の香炉が置かれている家があり、右側に祖先の香炉、左側に神霊の香炉が置かれている。この家では、仏陀が最も重要な神であり家族を守っている。祭壇を拝むときは、中央の仏陀、次に右側の祖先の香炉、最後が神霊である。他に中央に祖先とオンタオ、土公、左右に両親の香炉とバーコートーの香炉を置いている家もある。

香炉が二つ置かれている場合は前後に配置され、前面に祖先の香炉と背面に「神霊」の香炉、または前面に仏陀の香炉、背面に祖先の香炉が置かれている（写真3）。前の香炉がより重要である。

祖先の祭壇がなく「神霊」の祭壇が置かれた家では香炉を一つ置いてオンタオや土公などが祀られている。また、部屋の中央に仏陀の祭壇、その隣に祖先の祭壇が置かれ、一つの香炉で祖先やオンタオ、土公などの神霊を祀っている家もある。

また、普段はオンタオを祀らず、1年に1度オンタオの儀礼のときにだけ祖先の祭壇に供物などを準備し見送り儀礼をするという家族もいる。

b. 旧ハータイ省

旧ハータイ省（現ハノイ市）に住む2人の男性（1972年生まれ、1984年生まれ）の家には、オンタオの祭壇がある。祖先の祭壇が置かれた同じ空間の右側にオンタオの祭壇が置かれている。離れにある台所ではオンタオは祀られていない。オンタオの祭壇には香炉が置かれ、果物や水が供えられているが神牌などはない。

写真3 二つの香炉
前後に配置

c. タイビン省ヴァートゥー県ヴァーホイ社ミーアム集落

オンタオは祖先の祭壇で祀られている。祭壇に置かれた香炉は、三つ、五つ、七つなど家によって数は異なるが、どの家も中央の香炉でオンタオが祀られている。ここでは神霊の香炉ではなくオンタオの香炉が置かれている。また、2012年調査ではタイクンによると、新たにオンタオの香炉を置くときには、香炉のなかにオンタオの護符を入れるという（写真4）。タイクンは昨年亡くなり今回の調査では、新たに今後タイクンになる予定の人に話を聞いたが、同じように護符を入れることで（オンタオの香炉）になるという。しかし、聞き取りを行った家のオンタオの香炉に護符は入っていないようである。



写真4 タイクンの家
オンタオの香炉（中央上）

オンタオの香炉が祖先の祭壇にある理由について、タイクンや他の人々も祖先の霊以外の悪霊が家に入るのを防ぐためと答えている。祖先の命日には、まず初めにオンタオを拝み祖先の霊を家に入れる許可を得る。祖先以外の悪霊を家に入れられないためであるという。

d. キムラン村⁽²⁰⁾

キムラン村はハノイ市郊外ザーラム（Gia Lam）県の南端、紅河左岸の堤外地に位置し、ハノイ中心から直線で10 kmほどの場所にある。李陳朝期には陶磁器生産が行われていた歴史的な地域である。

祖先の祭壇にはオンタオは祀られていない。離れに台所が作られ、そのなかに昔から炉が置かれている場所がある。オンタオはその炉にいるという。現在は鉄の五徳が使われているが、以前は三つの土製支脚を使用しそれがもともとのオンタオの神体であった。土製支脚から鉄の五徳に変わってもオンタオは炉に置かれた五徳で祀るという。炉には香炉や祭壇などはない。

② 家のなかの神とオンタオと土公について

北部地域では陰暦12月23日の儀礼は、「オンコン・オンタオ儀礼」とも呼ばれている。オンコン（ông Công 翁公）とは土公のことである。オンタオと土公については、ハノイ市とハノイ市以外の北部地域の人々とのあいだで違いはない。

祭壇に置かれた「神霊」の香炉では、オンタオと土公が祀られているが、オンタオと土公の関係についての考えは様々である。例えば、オンタオは台所や家（家族）を守り、土公は家の土地全体を守ると二つの神を区別する人、オンタオ三柱と土公一柱でオンタオの儀礼では四柱を祀るという人もいる。またオンタオ三柱はオンタオ、土公、土地神（Thần Đất）であり、土公とオンタオは一つという人、オンコンとオンタオは同じ神で家を守るという人、オンコン・オンタオは概括的な呼び方でオンコンは土地を守りオンタオは家を守るが一つの同じ神という人などがいる。

タイビン省ミーアム集落では、祭壇の中央に置かれている香炉はオンタオの香炉であるが、オンタオと土公は同一の神だという。家に悪霊が入るのを防ぐ役割や、命日には最初にオンタオを拝み祖先

が家に入る許可をもらうというのは家の敷地や土地を守る土公の役割である。

また、オンタオ、土公、祖先を祀る以外に、仏陀の祭壇を置き厚く信仰している人も多い。商売をしている人などは家屋の外や入り口に財神と土地神を祀っている。なかには、オンタオは一年に一度拝む神で、財神 (thần Tài) と土地神 (thần Đất) には毎日供物を供えているから、オンタオよりも財神が大切だという人もいる。その家では、財神には豚肉のハム (giò lụa)、土地神には生の豚肉 (thịt lợn sống) を供えている。

③ 台所形態の変化、土製支脚と新旧交代について

以前、土製支脚はどの地域でも使用されていた。いつまで使用していたかをはっきり記憶している人は少ないが、1995年以前は農業が主な生業であった旧ハータイ省の2人や現在も農業が行われているタイビン省ミーアム集落の人々は1990年頃まで土製支脚を使用していたという。ハノイ市に住む人たちも1990年前後まで炉で薪を燃料とした五徳や土製支脚を使用していた。そして土製支脚は、多くの家で自分たちで土を捏ねて作っていた。土製支脚のあと、または並行して鉄の五徳が多くの家で使用され、その他に炭を燃料とした土製コンロやオイルコンロなども使用された。現在はほとんどの家でガスコンロが使われ、最近ではIHコンロなども使用されている。ミーアム集落では日常はガスコンロを使うが、現在でも正月準備や儀礼のときなどの料理を作るときには炉に置かれた五徳を使用している。

土製支脚で煮炊きをしていたとき、土製支脚がオンタオであったと全員が述べている。また、3本足の鉄の五徳や土製の移動式コンロもオンタオだったという人もいる。しかし、土製支脚などが置かれた炉にオンタオを祀るためのものや祭壇を置いていたという話は聞かれなかった。土製支脚の交換については、ハノイ市と旧ハータイ省の人々は壊れたときに交換するだけで12月23日や年末などには交換していない。わずかに毎年12月23日に土製支脚を交換し、古い土製支脚は池に捨てていたという人がいた。タイビン省ミーアム集落の人々は、毎年陰暦12月23日の儀礼に土製支脚を交換するため、それに合わせて12月に入ると各家で土製支脚を手作りし、古い土製支脚は池に捨てていたという。

北部地域では土製支脚を「ダウザウ」といいオンタオであったため、人々は「3人のダウザウ翁 (ba ông đầu rau)」と呼んでいる。タイビン省やナムディン省出身の人たちも土製支脚を「3人のダウザウ翁」と呼んでいるが、旧ハータイ省の2人はダウザウという言葉が知らなかった。土製支脚は「3人のオンタオ (ba ông Táo)」と呼ぶのだという。

④ オンタオ儀礼と鯉について

陰暦12月23日オンタオ儀礼はベトナム全土で行われる。北部地域の儀礼で使用するマー (mã: 紙製祭祀用品) のセットは三つの冠と三足の靴、紙銭、紙の鯉三匹などが入った立体的なものである。3週間程前からハノイの旧市街やマーを売る店などでオンタオ儀礼用マーのセットが多数置かれていた。そして前日から当日の朝にかけて市場や道路沿いで鯉または鯉の変わりに金魚がタライや発泡スチロールの箱に入れられて売られていた。

北部地域の人々にとってオンタオは鯉に乗って天に上がっていくため、生きた鯉を供えて川や池に



写真5 亭の池に鯉を放生



写真6 オンタオのマーセット
オンタオ用、神霊用、アオザイ、紙銭



写真7 オンタオへの供物

放す。近年はマーのセットのなかに入っている紙の鯉を供えて燃やす人たちも多い。儀礼の日の午前中、ホータイ（西湖）では多くの人たちが鯉を放生するが、タイホー村に古くから住む人たちは昔も今も鯉の放生はしないという。

今回、陰暦12月23日（2016年2月1日）のオンタオ儀礼の調査をコット村の亭と二つの民家で実施した。

コット村の亭でオンタオは祀られていないが、陰暦12月23日には亭を守り管理する人（thù tù）⁽²¹⁾がオンタオへの祈禱文を読み上げる。村の人々は亭ではオンタオの祈願をしないため、亭の管理人がひとりで静かに村の人たちの健康や平安などを祈願する。そして、村の人々は家でオンタオ儀礼をしたあと、亭にある池に来て鯉を放生する（写真5）。年配の女性から子ども連れの若い母親、若い男性の姿もみられた。また、コット村の寺にある池でも多くの鯉が放されている。

ホアン・ティ・グウ（Hoàng Thị Ngű）氏（81歳）の家では、オンタオ儀礼は午前中に行う。祖先の祭壇に供物；鶏一羽、バインチュン（または、おこわ）、春雨の炒め物、揚げ春巻き、スープ、果物を供える（写真7）。祭壇には祖先の香炉と神霊の香炉が置かれているがオンタオはおらず、1年に1度12月23日にオンタオを祀るだけという。日常、グウ氏にとって家族を守る重要な神は村の寺と亭と三つの廟である。しかし、儀礼の日は朝から多くの供物を準備し、オンタオ三柱のマーのセットと神霊用という冠と靴の1セット、紙のアオザイ、

大量の紙銭を祖先の祭壇に一緒に供え（写真6）、儀礼が終わるとその大量のマーを家の中庭で燃やしていた。グウ氏の家では生きた鯉ではなく紙の鯉を供えており、またオンタオへは線香をあげただけで祈願文は唱えていなかった。

グウ氏の家ではオンタオ三柱ともう一つ神霊用のマーを供えている。北部地域ではそのように儀礼のときにオンタオ三柱と土公または神霊など合わせて四神を祀る家がいくつもある。

ホアン・ヴァン・ティエン（Hoàng Văn Tién）氏（57歳）の家のオンタオ儀礼も供物はほとんど同じである。グウ氏と異なるのは、生きた鯉を供え、オンタオへの祈願を唱えていた点である。どちらの家族とも多くの紙銭や冥器を燃やし、儀礼のあとはオンタオに供えた供物は家族の昼食となる。

以上が現在の北部地域のオンタオ儀礼である。次に前述した文献資料のオンタオの記述と合わせて北部地域のオンタオの変化を整理していく。そのためにまず北部地域以外での現在のオンタオの祀り方を簡単にみていく。

IV 中・南部地域のオンタオ

中・南部地域のオンタオ儀礼については、2015年に報告をしているためここでは簡単に特徴を述べていく（鍋田 2015a, b）。

(1) 中・南部地域のオンタオ

① 中部ホイアン市のオンタオ⁽²²⁾

クアンナム省ホアイン市の旧市街にある数軒の家屋には19世紀末から20世紀初頭にかけて作られた竈が残されている。これらの家では、現在の台所ではなく、昔の竈がある壁の高い位置にオンタオの祭壇は作られている。竈もオンタオの祭壇も東側に位置している。

祭壇には、「定福灶君」と書かれた神牌、香炉、花瓶、燭台またはランプが置かれ、オンタオ儀礼ではおこわ、果物、甘いものと紙銭、マーを供えている。鶏は財神に供えるためオンタオには供えず、鯉も供えていない。毎月陰暦1日、15日にもオンタオの祭壇に簡単な供え物をして拜んでいる。オンタオを拜むことで家族が幸せでいられるという。



写真8 ホイアン
オンタオの祭壇

② 中部フエ地域のオンタオ⁽²³⁾

フエ地域では、台所の壁の高い位置にオンタオの祭壇が作られている。特徴としては、祭壇にオンタオ三柱または土製支脚を象った小さな土製の神像が祀られている。陰暦12月23日に家でオンタオを見送る儀礼をしたあと、1年間祭壇で祀られた神像は神聖な木の下や地域の廟などに捨てて再度見送り儀礼をする。この儀礼のときにはフエのシン村で製作されるオンタオの版画が燃やされる。



写真9 フエ地域 オンタオの祭壇
香炉の奥に神像

また子どもを保護する役割もあり、昔は10歳になるまで子どもの命をオンタオに預ける儀礼をしていた人も多かったという。普段は毎月陰暦1日、15日だけでなく、家族に何かあるときはオンタオを拜んだりお願いしたりするという。

儀礼では、おこわと果物、オンタオの版画が供えられ、儀礼のあと版画を燃やす。オンタオ用のマーのセットを使用する人は少ない。また、鯉を供えることもなく、鶏はフエ地域の儀礼である土神に供えるものであるためオンタオには供えない。

③ 南部地域のオンタオ

ホーチミン市や南部地域では、オンタオの祭壇は台所にあり、「定福灶君」と書かれた神牌が置か



写真10 南部地域 オンタオの祭壇
1970年以前からある神牌

れている。祭壇の方位は家主の生まれ年によって決まるという人もいるが、どの家も現在の台所のガスコンロが置かれた場所近くの壁の高い位置に設置されている。

「定福灶君」の神牌は1960年代結婚したときから夫の家にあり、現在も当時の神牌を祀っているという人もいる。

毎月陰暦1日、15日と12月23日にはオンタオを祀り、その他にも家族に何か出来事があるときはオンタオに拝むという。

儀礼では、祭壇におこわと果物、ぜんざいを供える。

鶏の供儀は家族により、供える人や供えても供えなくて

もいいという人、財神への供物のためオンタオには供えないという人とそれぞれである。

60歳代の人たちは、子どもの頃煮炊きに土製支脚を使用し、その土製支脚はオンタオであり1年に1度オンタオ儀礼のときに古い土製支脚を木の下に捨てていたと話している。

(2) 北部地域と中・南部地域との比較

北部地域とその他の地域の大きな違いは四つあげられる。

- ① オンタオを祀る場所は、北部地域以外では、台所に祭壇が作られている。そこではオンタオのみが祀られ他の神は祀られていない。
- ② 中南部地域ではオンタオと土公が混同されたり一緒に祀られたりすることはない。中南部の家庭の土地神は財神とともに祀られるオンディア（翁地 ông Địa）であり、フエ地域では独自の土神（Thần Đất）の儀礼が行われている。そのため、家を保護する神として土公の存在を知っている人は少ない。
- ③ 中南部では日常的にオンタオを拝み保護を求めているのに対し、北部地域では日常はあまりオンタオの存在がみられない。
- ④ オンタオ儀礼は、北部地域ではどの家庭でも鶏が供えられるが、中南部では非常に少ない。特にフエやホイアンでは鶏は他の神や儀礼の供物である。北部地域では、オンタオの冠や靴などのセットも大きく立体的であり、大量の紙銭を燃やし、供物の品数も多く非常に賑やかな儀礼である。また家によってはオンタオ三柱と神霊または土公、合わせて四柱の神をマーを用意し儀礼を行っていることも特徴としてあげられる。

小結 — 文献資料と現在のオンタオの整理からみる北部地域のオンタオ —

北部地域のオンタオについて文献と調査の資料、中南部との比較から整理し、その特徴と変化について少し考えてみたい。

(1) オンタオを祀る場所

18世紀から20世紀初頭までオンタオは台所で祀られ、18世紀の資料にはオンタオを描いた絵を台

所に貼ると記されている。今回の北部地域の調査では、オンタオが描かれた紙や絵を貼っていたという人はいなかったため、いつ頃まで版画が貼られていたのかは現時点ではわからない。また、ハノイ市のタイクン以外には台所でオンタオを祀る人もいない。しかし、キムラン社の家では今でもオンタオは炉にいると考えられている。これはオンタオを祀る具体的なモノはないが、最も古い時代のかたちを継続しているといえる。

現在ほとんどの家では、1990年代の報告と同じくオンタオは祖先の祭壇で祀られている。台所から祖先の祭壇にオンタオが移動したのは、1909年オジェ編纂の版画以降1990年頃までだと考えられる。

また、1967年トアン・アインの記したオンタオの祭壇とはほぼ同一と思われるものが、現在も旧ハータイ省の家で祀られていることが明らかになった。しかし、旧ハータイ省以外に事例がないこと、オジェ編纂のオンタオの版画も祭壇の置かれている場所は不明であること、そして1900年代のある一定期間に北部地域のオンタオを祀る場所が、台所から祖先の祭壇の隣に独立した祭壇を作り、その後現在の祖先の祭壇へ移ることも考えにくい。それらのことなどから、トアン・アインの記したオンタオの祭壇は北部地域の特徴ではなく、旧ハータイ省など特定の地域の可能性が考えられる。

現在ハノイ市では、オンタオは祖先の祭壇に置かれた「神霊」の香炉や「神霊」の祭壇で祀られている。この「神霊」とは様々な神の表象であり、家によっては、「神霊」の香炉にオンタオや土公だけでなく土地神や龍神、雷神なども祀られている。文献には、祭壇で土地神霊やオンタオなどが一緒に祀られているという大西の報告以外にオンタオと神霊に関する記述はない。祭壇に置かれた「神霊」の香炉にオンタオやその他の神と一緒に入れられるようになったのは新しい変化の可能性が考えられる。

また、チャン・ゴック・テムの記した祖先の祭壇に置かれたオンタオの香炉はハノイにはなかった。しかし、タイビン省ミーアム集落の人々の家では祖先の祭壇にオンタオの香炉が置かれている。タイクンによれば香炉にオンタオの護符を入れることで正式に「オンタオの香炉」となるという。このミーアム集落の事例は北部地域でも特別な事例の可能性が考えられる。

現在、祖先の祭壇で祀られるオンタオは、中央に置かれた一つの香炉で祖先とオンタオ、土公などを一緒に祀る場合と、三つの香炉の中央に「神霊」の香炉を置きオンタオを祀る場合があり、どちらもオンタオは祭壇の中央で祀られている。チャン・ゴック・テムや大西の報告のように祭壇の右側（祭壇からみて左）の香炉でオンタオを祀る家は今回の調査ではみられなかった。祖先の祭壇の中央でオンタオが祀られることについては次章で考察する。

(2) 家のなかの神とオンタオと土公について

17世紀中頃から20世紀初めまで家のなかで三つの神；オンタオ・土公・先師が祀られ、オンタオと土公はそれぞれ別の神として区別されていたが、現在の北部地域の家でこの三神は祀られていない。その代わりに三神のなかのオンタオと土公と一緒に祀られ、オンタオ儀礼がオンコン・オンタオと呼ばれるほど密接な関わりを持っている。これは他の地域にはない北部地域の特徴である。なぜオンタオと土公が密接になり、混交し始めたのだろうか。

東アジアの土公信仰を研究する張麗山は、ベトナムの土公と竈神について、古く中国から伝来し家宅の土地守護神として祀られていた土公は、土地（福德正神）信仰により家宅の守護神に抽象化さ

れ、近代以来の漢民族の大量移入に伴い竈神を「一家之主」とする漢民族の影響を受け、竈神の祭祀となったと述べている（張 2015：86）。張が記した漢民族の大量移入は、清末期の南部地域への移入である。オンタオと土公の混交は中南部地域にはなく、北部地域の特徴である。しかも、20世紀に入ってからの変化でもある。地域の混合などの問題がみられるが、張の指摘した土公の役割の変化やオンタオの役割との重複は二つの神が混交する大きな要因であると思われる。

北部地域で信仰されてきた土公は、少なくとも17世紀には家で祀られていた。土公の役割は、1651年ロード神父の辞典によれば土地を守る神であり（Alexandre De Rhodes 1991（1651）：770-771, 222-223）、1659年タベルニエの記したBuabinは家を建てるときに祀る神である（Tavernier 2011（1681）：99）。1750年テクラ神父は、土地または彼らの住む場所を守る神としている（Adriano di St. Thecla 1750：147）。17世紀の土公が土地を守る神であることは明らかであるが、テクラ神父の資料からは土地だけでなく家を守る神でもあるという解釈もできる。その後、1915年の資料には土公の役割は記されていないが、1938年ダオ・ズイ・アインはオンタオを「台所の神」、土公を「本土（建物の存在する場所）の神」と区別し、土公は土地を守る神だけでなく家族に不運があるときに保護を求めると家族を守る役割も持つことを記している（Đào Duy Anh 1938：247-248）。1940年代から土公が台所の神でもあるというオンタオと混交した記述が出てきている。

末成は、北部ベトナムの土地神の特徴を抽象性であるという。そして土公は、土地だけでなく宅地を介して家庭の守護神、土地関係の守護神の総称となる総合性を示している（末成 2000：72-73, 2005：173-175）。

土地を守る神から次第に土地に関係する家やその生活の守護と役割を広げた土公と、台所と家族を保護するオンタオの役割は重複していく。そこには北部地域の土公（または土地神）の特徴である抽象性と総合性があり、より容易にオンタオと土公は混交していったと考えられる。

そしてトアン・アインが記したオンタオ三柱それぞれの役割「土公、土地、土圻」は、土（地）神の役割である。張も指摘しているように（張 2014：82）、1923年の『土神考正増補』に土神には土公、土地、土圻の三位があると記されている⁽²⁴⁾。土圻、土地、土公は本稿Ⅱの①で述べたように1651年のロード神父の辞典の「土（神）」の項目のなかでも同様に説明されている。オンタオの昔話のなかで3人の役割を「土公、土地、土圻」としたのは、トアン・アイン以前の資料にもオンタオの昔話を研究したグエン・ドン・チーやロルフ・スタンの資料にもみられない。おそらくオンタオと土公の混交により、土公の役割がオンタオの昔話に取り込まれたと思われる。そして昔話を通してオンタオと土公の混交はさらに広まった可能性が考えられる。

（3） 台所形態の変化、土製支脚と新旧交代について

多くの人々は農村だけでなくハノイ市内でも以前は自分たちで土製支脚を作っていた。そのときは土製支脚がオンタオであった。H. V. V の報告によると1948年頃には都市では五徳やコンロを使用し、田舎でも五徳の使用が増え土製支脚を使用する家が減っている。そして1990年前後に境に炉に置かれた土製支脚や薪を燃料とした五徳、炭を燃料とした土製コンロから高台に置かれたガスコンロへと変わっていく。

調査では、古い土製支脚を1年に1度オンタオ儀礼のときに交換していたという人は多くなく、交

換する場合も池や川に捨てており、オジェ編纂の版画に描かれた木の下に捨てるという人はいなかった。しかし、現在でもフエ地域では神像や土製支脚を木の下に捨てている。南部地域でも以前は木の下に土製支脚を捨てていた。それらのことから、おそらく北部地域でも、オジェが版画に残しているように木の下に捨てて交換していた可能性がある。

(4) オンタオ儀礼と鯉について

北部地域のオンタオ儀礼は、他地域と比べて供物の品数が多く、冠や靴などのマーも大きく大量の紙銭を燃やしていることがわかる。鯉については、紙の鯉を供える人もいるが生きた鯉を供え川や池に放生する人も多い。しかし他の地域では一般的ではない。

この鯉を供える儀礼は20世紀に入り文献に登場する。それ以前に鯉の放生が行われたかは現時点では不明である。オジェ編纂の版画では、土公の祭壇に鯉が供えられていることも留意したい。中国では龍神の儀礼では紙馬を燃やすため、一般的に鯉の放生はない。地誌資料から中国の龍神を研究した余瀾によると、僅かに浙江省と広東省の漁民が龍神儀礼で生きた鯉を放生している(余1998: 115)。鯉の放生はベトナムのなかでも北部地域のみである。そのためチャン・ゴック・テムの記した農業と鯉を結びつけるのは難しい。鯉の放生については今後、もう少し資料を収集して考えてみたい。

以上、文献資料と現在の北部地域の実態を整理することで、(a)20世紀に入りオンタオを祀る場所が祖先の祭壇へと移動したこと、(b)オンタオと土公の混交の要因として土公の役割が変化したこと、(c)オンタオが絵や紙、土製支脚といった具体的な神体を持った神から、祖先の祭壇の「神霊」の香炉で他の神々と一緒に祀られる抽象化されたオンタオに変化したこと、(d)20世紀初頭には北部地域でも土製支脚を木の下に捨てオンタオの交換がされていたこと、(e)鯉の放生が20世紀に入り新たに行われた可能性が明らかになった。

次章では、オンタオの祀り方が抽象化する背景と、そのことによるオンタオの役割の変化や人々の観念について考察したい。

V 考察

20世紀に入り、北部地域のオンタオは祖先の祭壇で祀られるようになる。独立したオンタオの香炉はなく、「神霊」の香炉でオンタオや土公などの神と一緒に、または祖先とともに一つの香炉で祀られる。この変化の背景についてまず考察し、次に抽象化されたオンタオに対する人々の観念について考えたい。

(1) 抽象化されたオンタオ——祖先の祭壇の「神霊」の香炉で他の神々と祀られるオンタオ——

祖先の祭壇でオンタオが祀られるという報告は、1990年以降であり、それ以前の文献には記されていないため具体的な変化の時期はわからない。ここでは、台所形態の変化とオンタオと土公との混交、北部ベトナムの社会の特徴からオンタオが抽象化されていく背景について考えたい。

まず一つは、台所形態の変化である。昔、土製支脚はオンタオであった。H. V. Vの資料によると1940年頃から土製支脚が使用されなくなっている。しかし、炉にはまだ炭を燃料とする土製コンロ

や3本足の鉄の五徳が置かれ、人々にとって土製支脚だけでなく土製コンロも五徳もオンタオと考えられていた。炉という場所で煮炊きに使用する道具がオンタオであった。すなわち、それらを使用していたときまでオンタオは依り代を持った具象的な神であった。

1990年前後は台所形態が大きく変化した時期である。炉に置かれた土製支脚や五徳、土製コンロなどから高台にガスコンロが置かれ始める。炉から高台に台所形態が変わる時期のオンタオの祀り方について、北部地域以外をみてみたい。

中南部地域で祀られる「定福灶君」の神牌は、1970年以前から家で祀られている。この神牌が華僑・華人の影響だとすれば、炉で土製支脚や五徳を使用していた頃からすでに神牌が置かれていた可能性が大きい。そのため台所形態が変化してもオンタオの神牌はそのまま台所で祀られ続けることができたと考えられる。

フエ地域では、土製支脚を使用している頃から小型の土製支脚を象った神像が製作され祀られていた。それがかたちを変えながら現在もオンタオの神体として祭壇で祀られている。

中・南部地域やフエ地域と比べ、北部地域の多くの家では炉に置かれた土製支脚やコンロなどの実用品そのものがオンタオであり、他に神体は祀られていなかった。そのことが煮炊き道具や炉空間がなくなったことで依り代を失うことになった。そして新たな依り代としてもともと香炉が置かれていた祖先の祭壇で他の神々とともに祀られるようになったのではないだろうか。

二つ目の可能性として、オンタオと混交される土公の役割が考えられる。オンタオは台所の神であり家族を見守る神である。しかし、タイビン省ミーアム集落の家々では、命日に祖先の霊を家に入れる許可をオンタオに求める。祖先の霊を家に招き入れるときに、他の悪い霊も一緒に入れないためであり、そのため祖先よりも先に拝むのである。これは土公の役割である。北部地域の土公は具体的な依り代を持たない抽象的存在であり、その性格である総合性から役割を広げてきた。17世紀に家で祀られていた土公は土地を守る神であったが、いつからか土地だけでなく家とその家族を守る神へと変わっていった。変化の時期は、18世紀にその兆しがみえるが定かではない。土公の大きな変化はおそらく家で三神が祀られなくなる頃ではないだろうか。家の守護という役割が土公のなかで大きくなることで三つの神の役割が曖昧になり、台所と家族を守るオンタオの役割と重複し、混交されるようになったのではないかと考える。そして、台所形態が変化しオンタオの依り代がなくなることで二つの神はさらに混交し、祖先の祭壇で祀られるようになったと考えられる。

三つ目として、北ベトナムの社会主義政策の影響である。1945年に成立したベトナム民主共和国は1954年ベトナムの南北分断以降、北部ベトナムでは本格的に社会主義改造に着手する。迷信異端の禁止が強化され、様々なベトナムの民間信仰が禁止された。しかし、末成が殆どの家で土地改革以降社会主義政策が強力に実施されていた頃も、オンタオを含めた家の土地関係の守護神の総称としての土公は拝まれていたと記しているように（末成2000：73、2005：173）、筆者の聞き取りでも1954年以降もオンタオを祀ることは迷信異端として禁止されてはいなかったという。だが、なかには自分も村の人たちもみんなどんな儀礼もできなかったという人もいた。それはおそらく現在のように賑やかな儀礼ができなかったということだと思われる。厳しい社会主義体制のなかで、たとえ禁止されていなかったとしてもオンタオを祀ることは小さくなり、土公と統合され、または祖先と一緒に一つの香炉で祀られ儀礼が行われていたと考えられる。

以上のように、複合的な要因のなかでオンタオは抽象化され、祖先の祭壇で「神霊」という名前の香炉で他の神々とともにまたは祖先とともに祀られるようになったと考えられる。

(2) 北部地域の人々にとってのオンタオ

抽象化されたオンタオは、北部地域の人々にとって普段はあまりその存在が意識されていない。それは、オンタオの祭壇が置かれている中南部地域との大きな違いである。オンタオが抽象化されたことで人々にとってオンタオは重要な神ではなくなったのだろうか。

オンタオは、一年に一度オンタオ儀礼のときに拝む神だからと日常は拝まない人たちや、オンタオは台所にも祖先の祭壇にもいないという人たちも、一年に一度のオンコン・オンタオの儀礼は他の地域に比べて盛大に行っている。供物の数も燃やす紙銭やオンタオの冠や靴などのマールも多い。この日常と儀礼の差について、タイホー村の西湖府周辺で売られていたオンタオ儀礼で使用する疏文から考えてみたい。ここに、下記のような興味深い一文が記述されている。

窃ひそか恐るらくは、方隅ほういの禁忌ある、或いは咎犯きゆうほんに由よって居處いばしょと行藏しゆつしよしんたいを通ること難きを以て、誠にかた吉凶もつは之まことを趨避これくる莫なきを。茲ここに節礼の禱祈いつさいのわがわいもて一切之災殃しづめとを安解のき、河沙むかえし之吉慶そぶんを逐令むかえしめんとするに逢あいたり。⁽²⁶⁾

上記疏文の主旨は、恐れているのは方位(27)の禁忌であり、かといって咎犯のように居所と出処進退も悟ることが難しいので吉凶の事象を避けることができない。そのためオンコン・オンタオ儀礼のこのときに祈禱することで、一切の災いを解除し大きな吉慶を迎えることができる、というものである。

つまり、一年に一度オンコン・オンタオ儀礼で祈禱することですべての災いが解かれ、幸せや喜びが訪れるのである。ここに、人々が一年に一度オンタオを祈願すると話す理由が記されているのではないだろうか。これはフエ地域の疏文には記されていない。上記の内容を記した疏文が書かれた背景は現時点では分からない。しかし、陰暦12月23日にオンタオ（と土公）を拝むことが非常に重要であり、またオンタオ（と土公）が強大な力を持った神であることがわかる。

そして現在、オンタオは祖先の祭壇の中央で祀られている。香炉の数は家により違いがあっても、他の神や祖先と一緒に祀られていてもほとんどの家でオンタオは中央に置かれている。それは最近の変化の可能性もあるが、中央で祀るということは人々がオンタオを重要な神として認識していることの表れだとみることができる。チャン・ゴック・テムの述べた五行思想からみると、中央に置かれたオンタオ（オンタオを含む「神霊」）は、祖先と同等、また祖先よりも重要であるといえる。そして、タイビン省ミーアム集落でもハノイでも、中央の香炉から拝んでいる。つまり、オンタオがまず最初に拝まれているのである。

また、人々の意識とは別にオンタオが拝まれている事例もある。一つの香炉で祖先やオンタオ、土公を祀り、日常はオンタオを拝まないという家がある。しかし、毎月陰暦1日、15日に祭壇に向かって読み上げる祈願文にはオンタオの名前が載せられている。オンタオを拝んでいるという意識がなくても、実際には毎月二回他の神や祖先とともにオンタオも拝んでいるのである。

現在、北部地域ではオンタオの依り代や神牌はなく、他の神と一緒に「神霊」の香炉で祀られるこ

とが多いため、人々からは日頃は存在をあまり意識されなくなっているように見えるが、実は非常に重要で強力な神として人々の生活に関わっているのである。

おわりに

本研究では、北部地域のオンタオについて文献資料と現在の儀礼の実態から整理し、具象から抽象へと祀り方が変化したことを明らかにした。オンタオが祖先の祭壇で祀られる背景に、台所形態の変化、土公との関係、北部ベトナムの社会主義政策が影響していることを指摘し、抽象化されたオンタオに対する人々の観念について考察した。

北部地域でオンタオが祖先の祭壇で祀られるのは、20世紀に入ってからであった。それ以前、1750年の資料には台所にオンタオの絵（または紙）が貼られ、そこには男性2人と女性1人と女性の召し使い1人の4人が描かれていたことが明らかになった。また、20世紀初頭にオンタオである土製支脚を木の下に捨て交換するオジェ編纂の版画から、フエ地域の特徴と思われていた木の下でのオンタオ神像や土製支脚の見送り儀礼が、元は北部地域の儀礼であった可能性がでてきた。

次に、オンタオが祖先の祭壇で祀られる理由を以下の3点からみていった。①台所形態が変化するなかで、依り代であった土製支脚やコンロ、五徳などの使用がなくなったことに加え、炉から高台のガスコンロに変わったこと。②家族や台所を守るオンタオは、土地の神から家を保護するように変化した土公によって役割が重複し、その結果次第に混交していったこと。その背景には、元来の北部地域の土地神（土公）の持つ抽象性と総合性があったこと。③北部地域での1954年以降の厳しい社会主義政策の影響からは、迷信異端の禁止ではオンタオ儀礼は禁止されなかったが、賑やかな儀礼はできず小さくなり他の神々と一緒に祀られるようになった可能性が考えられること。上記の複合的な要因により、オンタオは台所から祖先の祭壇に移り、様々な神を象徴する非常に抽象的な「神霊」の香炉で祀られるようになったと考えられる。

抽象化され、日常あまり重視されていないように見えるオンタオだが実は土公と結びつき混交されたことで家族や家を保護する役割はより強大になっている。それは疏文に記された「年に一度オンコン・オンタオに祈願することで一切の災いが解かれ、家族の平安と幸せが訪れるように願う」という内容に表れている。だからこそ人々は、陰暦12月23日の儀礼を盛大に行うのだろう。そして、オンタオは現在、祖先の祭壇の中央、最も重要な位置で祀られている。これらから北部地域の人々の家族にとってオンタオは今でも非常に重要な役割を担っていると考えられる。

ベトナム全土で祀られているオンタオは、北部地域では土公と結びつき、独自の変化を経て祖先の祭壇の「神霊」の香炉で祀られるようになった。そこには北部地域の元来の土地神の性格が影響し、また北部ベトナムの社会政策とも関係していた。オンタオの抽象化は現在の北部地域の人々が生活に適合させながらも祀り続けてきたかたちなのである。

今後の課題として、北部地域のオンタオ調査の継続、漢文史料や地誌などの収集と研究を行っていく。また、煮炊き道具である土製支脚を木の下で交換することや鯉の放生などを陰陽五行思想の視点から研究していくことも考えている。今回取り上げられなかったが、毎年大晦日にオンタオを神官としてその年のベトナム社会を風刺する喜劇がテレビで放映されている。鯉に乗って登場する北部地域

のオンタオがイメージされていることや、テレビ放映によるオンタオ信仰への影響などについて今後調査をしていきたいと考えている。

謝辞

本研究は、2015年度非文字資料センター奨励研究の研究費支援を受け作成したものである。ベトナム北部地域での調査・研究にあたり、ベトナム社会科学文化研究所 Chu Xuân Giao 氏にご指導・ご教示を賜りました。ベトナム調査と本稿作成にあたり、以下の方々にご指導・ご助言・ご協力を賜りました。大西和彦先生（ベトナム宗教研究院）、Vũ Văn Thi 先生（ハノイ国家大学）、Nguyễn Thị Oanh 先生（漢喃研究院）、榎永真佐夫先生（国立民族学博物館）、指導教員である佐野賢治先生に心より感謝申し上げます。また調査に協力していただいたベトナムの皆さま、ベトナム語資料の翻訳に協力していただいたベトナム人学生や友人に改めてお礼を申し上げます。

注

- (1) 本研究では、ベトナムの龍神を「オンタオ」と記す。ベトナムの龍神は、中国の龍神の影響を受けているが、ベトナム独自の龍神を形成している。名称にもそれが表れている。中国の龍神の名称である灶君（タオクアン）をベトナムの人々は親しみの意味を込めて「オンタオ」（翁灶）と呼ぶ。そのため本研究では、「オンタオ」をベトナムの龍神の名称として使用する。
- (2) 鍋田 2015「ベトナム・フエ地域のオンタオ崇拜」で報告している。
- (3) 土地神の三つの役割のなかで注目するのは、「土圻」は神聖な土神であり、人々はその土地を保護する神だと考えている、「トーコウ（Thỏ cou?）」は、土の主（Chủ đất）で家の屋敷のなかで祀られ、土（地）を見守ると記された点である。トーコウ（Thỏ cou）がトーコン（土公）であれば、1651年には土地神として、土公、土圻、そして土地が祀られていたことになる。
- (4) ベント・ティエンがローマにいたイエズス会の宣教師に宛てた手紙の一部であり、ドー・クアン・チン（Đỗ Quang Chính）が2008（1972）に *Lịch Sử Chữ Quốc Ngữ 1620-1659*『ベトナム国語（クオックグー）の歴史』のなかで掲載している。ベント・ティエンの『アンナン国の歴史』については、蓮田隆志が詳しく記している（蓮田 2013：1-30）
- (5) 原文：Bếp thì thờ Táo quân, gọi là Vua bếp. Nó lấy chồng trước thì sa vào lửa mà chết, nó lại lấy chồng sau mà lòng còn thương nghĩa chồng trước, thì chồng sau đi xem nơi lỗ xưa, thì mình cũng sa xuống mà chết. Chồng sau thấy vợ chết, thì cũng gieo mình xuống mà chết, thì ba người vào một lỗ ấy; thì người ta nói bày đặt rằng : ấy là Vua bếp, thì phải cậy cho làm mọi việc nên.
- (6) 商人としてベトナム北部を訪れていた弟から聞いた話をもとに宗教や風俗について記した資料。
- (7) 訳者は、オンディア（土地神）ではないかとしている。
- (8) 原文：Every year, on the first day, they hang in the kitchen the image if these four painted on a leaf of papyrus, which is bought in advance. During the first three days they also make for them an offering of one sacrificial table with food, and they burn incense, and ask them for help in cooking and preparing food well for the family that year, and all such similar.
- (9) ベトナム社会科学文化研究所 Chu Xuân Giao 氏から資料の一部を提供してもらった。資料自体は未読である。
- (10) 原文：「送灶礼毎用鯉魚一匹、曰龍馬」、また「棄前灶于浄處、易以新灶」。
- (11) 東厨司命灶府神官とは龍神のことであり、龍脈は風水でいう「大地にある生気のルート」であるため、土地龍脈尊神とは土地（大地）に関する神であり、五方五土福德正神は土地神（土地公）のことである。
- (12) 解説では、オンタオを祀る（Thờ thần Táo Quân 灶君神を祀る）とあるだけで、台所という言葉はない。
- (13) 亭（ディン Đình）は、北部ベトナムでは村の鎮守社兼共同集会所などと訳される。陰暦正月のあと、

村では春祭りが亭を中心に行われる。

- (14) 土ヘン+殿 (Đền) とは、守護神などの祠廟、聖人を祀る廟 (川本邦衛編 2011『詳解ベトナム語辞典』: 515)。
- (15) タイホー亭に設置されている亭の解説と資料による。
- (16) もととの宗族; Nguyễn, Hoàng, Quán, Zoãn (Doãn)、その後 Trần, Lê, Ngô, Phạm, Công, Việt, Hữu, Kim がコット村に移ってきたという (グエン・フック・タム (Nguyễn Phúc Tam) 氏から話を伺った)。
- (17) タイビン省ホームページ <http://thaibinh.gov.vn/> 最終閲覧 2016. 7. 9。
- (18) タイビン省ホームページ <http://vuthu.thaibinh.gov.vn/> 最終閲覧 2016. 7. 9。
- (19) これまで 2012 年と 2015 年に報告をしている (鍋田 2012、2015: 42-50)。
- (20) 2012 年に聞き取り調査を実施し 2015 年に報告している (鍋田 2015: 43)。
- (21) コット村には祀られていないが、タイホー村の亭では以前オンタオが祀られていた。1920 年の『意識西湖村の慣習法』(*Lược Dịch Hương Ước Làng Tây Hồ*) には、灶君の位号として三位: 本家東厨司竈府神君、靈厨司命竈府神君、五音五姓三十六部竈君と記されている。現在、亭にオンタオは祀られていない。陰暦 12 月 23 日の儀礼でもオンタオは拝まれていない。
- (22) 鍋田 2015 「居住空間からみたベトナムのオンタオ (竈神) 祭祀——ホイアンの事例報告——」比較民俗研究で報告している。
- (23) フェ地域のオンタオについては、鍋田 2014 「フェ地域のオンタオをめぐる物質文化——オンタオ神像製作と儀礼——」『東南アジア考古学』34 号、2015 「ベトナム・フェ地域のオンタオ崇拜」『地域文化論叢』第 16 号 37-64、2016 「版画に描かれたモチーフとオンタオ儀礼」『年報 非文字資料研究』12 号で報告している。
- (24) 王小盾・劉春銀・陳儀『越南漢喃文獻目錄提要』原文: 称土神實有土公、土地、土祇三位; 又称土神在山則名山神, 在寺則名龍神, 在家則名土公云云
- (25) 広東省の鯉の放生については、民国 19 年刻本の佛山地区龙山乡志に、祭灶で鯉一匹を用いることが記されている (中国地方志民族資料匯編中南卷下: 804)。
- (26) 書き下し文は、大西和彦先生のご教示による。原文: 「窃恐方隅禁忌或由咎犯以難通居處行藏莫誠吉凶之趨避茲逢令節礼禱祈安解一切之災殃迓河沙之吉慶」
- (27) 咎犯 (きゅうはん) は、中国春秋時代の晋の政治家、狐偃の字。

参考文献

(ベトナム語)

- Alexandre De Rhodes (biên dịch: Thanh Lăng, Hoàng Xuân Việt, Đỗ Quang Chính) 1991 (1651) *Từ điển Annam-Lusitan-Latinh* (Thường gọi từ điển Việt-Bồ-La), Nhà xuất bản Khoa học xã hội, Hà Nội
- Bento Thiện 1659 “Lịch sử Nược Annam” Đỗ Quang Chính, Sj 2008 (1972) *Lịch Sử Chử Quốc Ngữ 1620-1659*, Nhà xuất bản Tôn Giáo: 176
- Chu Húc Cường 2013 “Tín ngưỡng thờ Táo Quân ở Việt Nam từ góc độ khảo sát thư tịch học” *Hội Folklore Châu Á trung tâm nghiên cứu và bảo tồn văn hóa tín ngưỡng Việt Nam, Văn hóa thờ Nữ Thần-Mẫu ở Việt Nam và Châu Á bản sắc và Giá trị*, Nhà xuất bản Thế giới: 308-325
- Cuisinier, Jeanne 1995 (1948) *Người Mườn Địa lý nhân văn và Xã hội học*, Nhà xuất bản Bản Lao Động
- Cửu Long Giang, Toàn Ánh 1967 *Người Việt Đất Việt*, Nam-chi Tùng-thư, Saigon
- Đặng Văn Lung, Nguyễn Sông Thao, Hoàng Văn Trụ 1997 *PHONG TỤC TẬP QUÁN các dân tộc Việt Nam*, Nhà xuất bản văn hóa dân tộc
- Đào Duy Anh 2002 (1938) *Việt Nam Văn Hóa Sử Cương*, Nhà xuất bản Văn Hóa-Thông Tin Hà Nội
- Đình Hồng Hải 2015 “Thần Bếp” những biểu tượng đặc trưng trong văn hóa truyền thống Việt Nam tạp 2 CÁC VỊ THẦN, Nhà xuất bản Thế giới, Hà Nội: 51-90
- Đỗ Quang Chính 2008 (1972) *Lịch Sử Chử Quốc Ngữ 1620-1659*, Nhà xuất bản Tôn Giáo

- Đoàn Triển 2008 (1906) *An Nam Phong Tục Sách* 安南風俗冊, Nhà xuất bản Hà Nội
- Huỳnh Đình Kết 1998 *Tục Thờ Thần ở Huế*, Nhà xuất bản Thuận Hóa, Huế
- Huỳnh Đình Kết 2001 *Tranh Làng Sinh Trong Đời Sống Tín Ngưỡng Dân Gian Huế*, Nhà xuất bản Huế
- Huỳnh Ngọc Trảng 2003 “ông Táo về trời” Tạp chí Kiên thực ngày nay số Xuân, số555, : 45-49
- Huỳnh Ngọc Trảng, Trương Ngọc Tường, Hồ Tường 1993 *Đình Nam Bộ, tín ngưỡng và nghi lễ*, Nhà xuất bản Thành phố Hồ Chí Minh.
- Huỳnh Ngọc Trảng, Trương Ngọc Tường, Hồ Tường 1994 *Văn hóa dân gian cổ truyền Ông Địa tín ngưỡng và tranh tượng* Nhà xuất bản Thành phố Hồ Chí Minh.
- Huỳnh Ngọc Trảng, Nguyễn Đại Phúc 2013 “Chương II : Táo Quân-Nhất Gia Chi Chủ” *Đặc khảo về tín ngưỡng thờ gia thần*, Nhà xuất bản Văn hóa văn nghệ : 35-56
- H. V. V 1948 “Cúng Ông Táo (Ngày 23 tháng chạp âm-lịch)”, *Dân Việt Nam Le Peuple Vietnamien*, Nhà xuất bản Viện Đông-Phương Bác-Cổ Edite par Lecole Francaise Dextreme-Orient : 37-38
- Lê Trung Vũ 2003 *Tết cổ truyền của người Việt*, Nhà xuất bản Văn Hóa-Thông Tin
- Nguyễn Đồng Chi 1956 *Lược khảo về thần thoại Việt-Nam*, ban nghiên cứu văn sử địa : 117-120
- Nguyễn Đồng Chi 1974 *Kho Tàng Truyện Cổ Tích Việt Nam Tập1*, Nhà xuất bản Khoa Học Xã Hội Hà Nội
- Nguyễn Xuân Kinh 2006 “Cái bếp và tục thờ thổ công của Người Việt”, *Nguồn sáng Dân Gian* số 4 (21): 80-85
- Nguyễn Xuân Kinh 2013 “Cái bếp của Người Việt”, *Con người, môi trường và Văn Hóa*, Nhà xuất bản Khoa học xã hội: 137-150
- Oger, Henri 2009 (1909) *Technique du peuple Annamite, Mechanics and crafts of the Annamites, Kỹ thuật của người An Nam I II III*, Nhà xuất bản Thế giới
- Phan Kế Bính 2011 (1915) *Việt Nam Phong Tục*, Nhà xuất bản Văn Học
- Toan Ánh 1997 (1967) *Nếp cũ Tín ngưỡng Việt Nam*, Nhà xuất bản Thành phố Hồ Chí Minh
- Trần Đại Vinh 1995 *Tín Ngưỡng Dân Gian Huế*, Nhà xuất bản Thuận Hóa, Huế
- Trần Ngọc Thêm 1999 *Cơ Sở Văn Hóa Việt Nam*, Nhà xuất bản Giáo Dục : 138-153
- Trần Thị Lệ Xuân 2010 “BẾP XƯA TRONG DI TÍCH Ở KHU PHỐ CỔ HỘI AN” *Bản Tin của Trung tâm QLBT Di tích*, Nhà xuất bản Trung tâm QLBT Di tích Hội An
- Tavernier, Jean Baptiste (dịch; Lê Tư Lành) 2011 (1681) “Chương XV Tôn giáo và những tục mê tín dị đoan của người dân Đàng Ngoài”, *Tập Du Ký Mới Và Kỳ Thù Về Vuiwbg Quốc Đàng Ngoài*, Nhà xuất bản Thế giới
- T. V. Tống 1952 “Tết Táo-Quân Triều Thiên” Cha Jacques Cua (giám đốc), Ngo Văn Thanh (chủ nhiệm kiêm Quản lý) *Cần Học* số 28 : 24-26
- Vũ Bằng 2006 “Tháng Chạp nhớ ơi chợ Tết” *Thượng nhớ mười hai*, Nhà xuất bản Văn Hóa Thông Tin : 248-281
- (英語)
- Adriano di St. Thecla (Olga Dror translator and annotator) 2002 (1750) *Opusculum de Sectis Apud Sinense et Tunkinenses* (A Small Treatise on the Sects among the Chinese and Tonkinese): *A Study of Religion in China and North Vietnam in the Eighteen Century*, Southeast Asia Program Publications Southeast Asia Program Cornell University Ithaca, New York
- Patrick Mcallister and Thi Cam Tu Luckman 2015 “The Kitchen God Returns to Heaven [Ông Táo Về Trời]: Popular Culture, Social Knowledge and Folk Beliefs in Vietnam” *Journal of Vietnamese Studies*, Vol. 10: 110-150
- (フランス語)
- Stein, R. A 1970 “La legend du foyer dans le monde chinois”, *Echanges et communications*, Mouton the Hague, Paris, pp 1280-1305
- (漢文)
- 『嘉定通志』卷3、鄭懷德、明命元年(1820)

- 『灶君経』 維新3年（1909）
- 『乱正竈神經文』 河内劍湖玉山祠蔵版、成泰18年（1906）
- 『大南一統志』 阮朝官撰、嗣徳35年（1882）維新三年序刊本
- 徐方宇 2006「汉族，越族民间灶神信仰之比较研究」『东南亚研究』2006年第3期
- 王小盾・劉春銀・陳儀『越南漢喃文獻目錄提要』
- 浙江民俗学会編 1986「第二章生産習俗」『浙江風俗簡誌』浙江人民出版社：292-293
- 丁世良 趙放主編 1991『中国地方志民俗資料匯編』中南卷下 北京図書館出版社（原書目文獻出版社）804
- （日本語）
- 大西和彦 1995「宗教と儀礼」桜井編『もっと知りたいベトナム2版』弘文堂：219-238
- 大西和彦 2002「ベトナムの正月行事と民間信仰」『アジア遊学』No.46 勉誠出版：96-104
- 大西和彦 2003「トゥアティエン——フエ省ティンフォック村諸族所蔵族譜・家譜中の道教関係記事初探」『ベトナムの社会と文化』第4号 風響社：110-139
- 大西和彦 2006「ベトナムの雷神信仰と道教」『国立民族学博物館調査報告』63号 国立民族学博物館：85-107
- 大西和彦 2011「ベトナムのカマド神」『Vina Boo』1月 Vol.44：16-17
- 大西和彦 2012「フエ地域の九天玄女信仰について」『周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化——周辺集落と外からの視点——』関西大学文化交渉学教育研究拠点：557-577
- 大西和彦 2013「カマド神信仰に見るベトナム女性商人の活躍」『Vina Boo』2月 vol.69：14
- 大西和彦 2015「ベトナムのカマド神雑話」『Vina Boo』2月 vol.93：14
- 川本邦衛編 2011『詳解ベトナム語辞典』大修館書店
- 末成道男 2000「北部ベトナムの〈土地神〉：華南漢族との比較」『ベトナムの社会と文化』第2号 風響社：64-85
- 末成道男 2005「ベトナムにおける〈土地神〉の変容のきざし——南から北へ——」『民俗文化の再生と創造』風響社：167-182
- 張麗山 2014「東アジアにおける土公信仰と文化交渉」関西大学学位審査論文 関西大学大学院東アジア文化研究科
- 鍋田尚子 2012「ベトナムのオンタオ（Ong Tao）（竈神）信仰：タイビン省ミーアム集落の事例報告」『沖縄国際大学地域文化論叢』第14号：25-47
- 鍋田尚子 2014「フエ地域のオンタオをめぐる物質文化——オンタオ神像製作と儀礼——」『東南アジア考古学』34号：59-74
- 鍋田尚子 2015「ベトナム・フエ地域のオンタオ崇拜」『沖縄国際大学地域文化論叢』第16号：37-64
- 鍋田尚子 2015「居住空間からみたベトナムのオンタオ（竈神）祭祀：ホイアンの事例報告」『比較民俗研究』29号：217-228
- 鍋田尚子 2016「版画に描かれたモチーフとオンタオ儀礼——シン村オンタオ版画を中心に——」『年報非文字資料研究』12号：177-197
- 蓮田隆志 2013「ベトナム・ティエン「アンナン国」の歴史」簡紹——情報の流通と保存の観点から」『環東アジア研究センター年報』第8号：1-30
- 余瀾 1998「中国かまど神と農耕儀礼について——地方誌民俗資料の整理を中心にして——」『人文学報』第292号 東京都立大学人文学部：103-118

タイビン省ホームページ <http://thaibinh.gov.vn/> 最終閲覧 2016.7.9

タイビン省ホームページ <http://vuthu.thaibinh.gov.vn/> 最終閲覧 2016.7.9